

2012年度事業報告書

財 団 法 人 東 洋 文 庫

2012年度財団法人 東洋文庫事業報告書

財団法人 東 洋 文 庫
理事長 榎 原 稔

2012年4月1日から2013年3月31日までに行われた財団法人東洋文庫事業報告の概要は下記の通りです。

事 業 項 目

I	調査研究.....	2
II	資料収集・整理.....	12
III	研究資料出版.....	12
IV	普及活動.....	13
V	学術情報提供.....	19
VI	地域研究プログラム.....	23
VII	受託研究.....	25

I. 調査研究

A. 超域アジア研究

超域アジア研究部門

(1) 総合アジア圏域研究班

「総合アジア圏域研究」

基本的な研究方法は、年度ごとに重点地域を定め、それをアジア規模の視野から多角的に検討するとともに、周縁諸地域との地域連関や相互影響関係を検討する。範囲は、基礎資料研究、現地研究、主題研究などに跨り、多分野間のまた国際間の比較研究を行う。また、資料、検討過程並びに研究成果は、英文電子情報としてオンラインにより発信する。このような総合的アジア研究は、アジア諸地域における資料収集と地域研究の蓄積を持ち、内外の研究連携を進めてきた東洋文庫においてのみ可能であると考えられる。

東洋文庫のすべての研究班の参加によって行われる重点研究としてこの「総合アジア圏域研究」があるが、基本的な検討項目は、各年度において選択した1つの地域のアジアの地域連関における位置と役割、地域間移民ネットワーク、ディアスポラ、トランスナショナル問題を検討する。ワークショップを開催して議論を重ね、現地調査・資料調査によって現代の諸問題を歴史的背景を含め提示する。これらの討論過程を、ワーキングペーパーや電子ジャーナルにおいて発信し、さらに議論を広げていくことを目指す。

[研究実施概要]

- a) 東洋文庫所蔵の貴重書を用いた講習会「アジア資料学研究シリーズ」を開始した。今年度は、石塚晴通研究員を講師とし、「東洋の Codicology “漢字文献”」として3日間のセミナーを開催した。内外の書誌学研究者、研究資料館らの応募があり、このうち先着で20名の参加を得た。
- b) 中央アジア研究班の3グループがコーディネーターとなり、中央アジア圏域シンポジウム“Central Asia Studies and Inter-Asia Research Networks: Integrated Study of Dynamism in the Central Asian Regional Sphere”を開催した。シンポジウムは2日間行われ、のべ138名の参加者を得て、活発な討論が行われた。
- c) 若手研究者の国際的な研究成果発信を支援するため、国立シンガポール大学出版のポール・クラトスカ氏を招き、セミナー“Scholarly Publishing in English : What Editors Expect”を開催した。東洋文庫に籍を置く若手研究員および日本学術振興会特別研究員が参加し、クラトスカ氏より英文研究論文の作成について指導をうけた。

(2) 現代中国研究班

「現代中国の総合的研究(2)」

現代中国は、政治、経済、社会の大改革を行い、その影響力は東アジアから広く世界に及びつつある。この動態を、歴史・文化の要因をも視野に収めながら、総合的に捉える研究体制(資料、政治、経済、国際関係・文化の各グループで構成)を構築した。資料の収集は東洋文庫の蓄積を基点としつつ、学際的研究と公開利用に向けて拡充と再編をはかる。その際、台湾中央研究院や中国社会科学院、ハーヴァード燕京研究所との学術交流など、海外・国内の研究機関との連携をいっそう強化し、政治、経済、国際関係・文化グループは研究会の開催を継続実施し、次年度以降における成果の刊行に備える。

[研究実施概要]

- a) 資料グループは、東洋文庫の英文定期刊行誌 *Modern Asian Studies Review* の第4号において、東洋文庫が所蔵する G.E. Morrison のコレクション、なかんずくパンフレット資料を活用した、18,19世紀、20世紀初頭の中国経済、アジア貿易に関する4本の英文論考を公刊した。またパンフレット資料1点ごとについて、summary and notes を施す作業を進捗させ、順次インターネット上で公開している。
- b) 政治グループは、政治・経済・行政・社会・法律各分野の専門家で陳情(信訪)に関心を持つ中堅・若い研究者をメンバーとする「総合研究－陳情」研究会第一期を隔月一回開催し、その成

果を毛里和子・松戸庸子編『陳情 中国社会の底辺から』(東方書店、2013年)として刊行した。引き続き第二期の研究活動に入っており、中国から研究者1名を招請して、ワークショップを開いた。

- c) 経済グループは、「歴史的視野から見た現代中国経済」研究の第2部として、「毛沢東時代の経済制度・政策の再検討」を推し進めてきた。中国から3名、シンガポールから1人の研究者を招聘し、また国内の近現代中国経済研究者を交えてシンポジウムを開催し、多角的視野から毛沢東時代の経済制度ならびに政策の現代的意味を議論した。引き続きこの作業を継続し、来年度には内外の研究者の研究成果を集めて、出版する計画である。
- d) 国際関係・文化グループは、全体的な研究テーマ「戦後中国の国際関係と社会・文化変容」の下、若手の研究報告を中心に年間4回の研究会を開催するとともに、汪兆銘政権大使館文書の目録作成を進めた。
- e) 政治グループ、経済グループ、国際関係・文化グループとも、図書資料の購入に関しては、東洋文庫の現代中国研究資料センターと提携して、系統的な収書を行う。

(3) 現代イスラーム研究班

「現代イスラームの超域的基礎研究

－議会主義の展開と立憲体制に関する一次資料の収集と比較分析研究－

世界の近現代イスラーム研究において、これまでほとんど用いられることのなかった中東諸国の議会文書(アラビア語、ペルシア語、トルコ語)を収集・整理・分析し、それぞれの地域(国家)に誕生した議会主義の政治思想と立憲体制の実態を比較・検討する。2009年度からは、新たに中央アジア諸国を比較の対象に加え、基本資料の収集と整理・分析を行う。これによって中東・中央アジアなどのイスラーム地域における国民国家の歴史的役割と今日的意義を一次資料にもとづいて総合的に考察する。他方、イスラーム関係資料の収集と整理、データベース化を推進し、日本における資料センターとしての充実をはかる。

[研究実施概要]

現代イスラーム研究班の活動は、資料の性格に対応してアラブ、イラン、トルコ、中央アジアの4グループに分かれて実行される。アラブ、イラン、トルコグループの研究は、第1期(2003年-2008年)の実績を踏まえて実施されたが、2012年度における各グループの研究実施概要は以下の通りである。

- a) アラブグループ:2011年度にひき続き *A Guide to Parliamentary Records in Monarchical Egypt* (東洋文庫、2007)を利用して、議会文書の解説・分析を進めた。
- b) イラングループ:2005年度に作成した議会文書のインデクス(CD-ROM版)を利用して、議会文書の分析を進めるほか、*The 1946 Republic of Kurdistan: A Research on the Struggle for Independence And Its Historical Significance* をクルド語と英文で出版した。
- c) トルコグループ:2006年度刊行の論文集『トルコにおける議会制の展開』を基礎に、関係資料の収集と議会文書の解析を進めた。
- d) 中央アジアグループ:研究の4年度目に当たり、引き続き関係資料の収集と整理を行った。年度末には合同研究会を開いて用語・訳語の検討を行うと共に、4分野間の比較分析を行う。なお、中国・日本の議会制・立憲制の専門家を招いて比較のための報告を頂いた。

B. アジア諸地域研究

1. 東アジア研究部門

(1) 前近代中国研究班

①「古代地域史研究－『水経注』の分析から－(2)」

本研究班では地域史という視点から、中国古代の地域社会の構造を検討してきた。その基礎となるのは『水経注』(原典6世紀、中国最古の地理書)とその諸注の再検討である。これを注文、疏文まで精読し、加えて考古学上の諸発掘成果およびランドサット衛星地図などと合わせて分析するという歴史地理学的方法による研究に挑んでいる。また流域の古代遺跡と『水経注』記載の内

容を合わせて検討することで、歴史的な自然環境・社会的実態を具体的に理解し、流域の地域社会の構造の変化を明らかにしていく。刊行を予定している『水経注疏訳注』渭水篇下巻及び洛水・伊水篇訳注もこれらの成果を反映させたい。渭水下流域及び洛水・伊水流域は「黄河文明」の中心地である。ここを「地域史」という観点から分析することは中国古代史研究においては新鮮な視点であり、『水経注』の研究という範疇を超えて、内外における中国古代史研究の新たな展開となる研究を目指している。

[研究実施概要]

- a) 陳橋驛復校『水経注疏』(江蘇古籍出版社刊)をテキストとし、洛水・伊水篇(巻15)の講読を隔週の研究会において実施した。洛水は陝西省東南部に発して東北流して河南省洛陽を経て、偃師県において河南省内を東北流してきた伊水を合わせた後、同省鞏県東北の洛口において黄河に入る。2012年度は源流から東周洛邑に至る流域までを検討し、すでに公刊された渭水篇訳注上・下巻に続いて、洛水・伊水篇訳注の刊行をめざしている。
- b) 『水経注』洛水・伊水篇訳注を刊行するため、洛水・伊水流域の地誌的記述及び考古学的調査・発掘報告の収集を実施した。またランドサット衛星地図などの情報を利用し、洛水流域の古代遺跡の状況を歴史地理学的に把握した。
- c) 2013年度に『張家山漢簡論文集』を刊行するため、隔週で研究会を実施し、準備を行った。また2012年12月23日より27日まで、武漢および荊州に出張し、張家山漢簡および関連遺跡の現地調査、荊州博物館での研究交流を行った。

②「中国社会経済史用語解集成の電子辞典化」

本グループがこれまでに作成・公刊した『宋史食貨志訳註(一)～(六)』(東洋文庫刊、1960年～2006年)、および『宋会要輯稿・食貨篇・社会経済用語集成』(東洋文庫刊・2008年)における訳註および用語の収集の成果をベースとして、整理と増補を加え、広範囲かつ多方面の利用者の便宜に適合するような冊子体および CD-ROM の用語解説集を作成し、研究活動のいっそうの発展に資するプロジェクトである。

[研究実施概要]

- a) 「前近代中国研究班」の中の「社会経済史用語解作成グループ」は、2012年度に作成出版した『中国社会経済史用語解』について、記載に正誤を施した上で、2013年1月10日、第2刷を増刷刊行した。
- b) 引き続き増補版の作成に着手し、「法制」の範疇を加えて、関連する用語解のデータを収集した。
- c) 「財政」「経済」「社会」の範疇についても増補の作業に入り、関連する用語解のデータを収集した。
- d) 毎月研究会を催し、史料・関連文献の読解・釈語データの収集を行った。
- e) 既刊の『中国社会経済史用語解』収載の釈語を、東洋文庫のホームページを通じて順次公開した。

③「東アジア都城の考古学的調査・研究(3)」

本研究班では、渤海を中心として東アジアにおける都城の比較研究を行ない、その研究成果として2004年度に『東アジアの都城と渤海』(全394頁)を、2006年度に『渤海都城の考古学的研究Ⅱ』を公刊した。しかしその中心となる渤海上京龍泉府址(東京城)出土遺物の調査・研究は、予想以上に多数の遺物があったため、一部の遺物の調査・研究を継続実施する。

[研究実施概要]

中国吉林省琿春市所在の八連城(渤海の東京龍原府に疑定されている)に関する発掘報告書の内容を検討し、百濟、新羅の都城に関する最新の情報の収集に努めた。

- a) 上記研究計画遂行のため、2011年12月23日から29日まで、中国東北地方の渤海遺跡出土の資料を実見する調査旅行を実施した。吉林省考古研究所の収蔵庫において、八連城、西古城、六頂山、査里巴、柚樹老河深遺跡出土の遺物を実見した。また、牡丹江市博物館を見学するとともに、渤海鎮の上京龍泉府址を踏査した。
- b) 『西古城』、『渤海上京城』、『六頂山渤海墓葬』の各報告書の内容を検討した。

- c) 2012年8月27日から9月1日まで、中国東北地方渤海遺跡の踏査を行なった。上京城址、興隆寺、三靈屯墓などを踏査し、現在の中国における調査の状況や遺跡の保存状態を確認した。また、牡丹江師範学院において開催された『渤海研究発表会』において、田村研究員は渤海の蓮華文瓦当について、清水信行はロシア沿海州クラスキノ城跡の発掘について発表を行ない、中国側研究者と交流を深めた。さらに、北京の国家博物館の見学を行なった。

④「前近代中国民事法令の変遷」

宋代以降の戸婚・田土・錢穀などを扱う「民事」法令を分析し、どのように変遷してきたかを明らかにする。中国の各時代の様々な法についての研究の中でも、近20年の特徴のひとつとして、法令の有効性、厳格性などを版牘文や契約文書によって検討する研究がなされてきたことがあげられる。契約文書や多くの条例、版牘文などが発見され、また中国国内にあるものが利用しやすくなったことにもよろう。本研究班も過去5年間、この方向で研究活動をしてきた。この5年間の研究をとおして、あらためて法令そのものに視点をあてる必要があることに到った。民事的な法令に限ったのは、社会状況を反映しやすく、社会の実態の変化を分析するに適していると見ているためである。一度できた法は常に現実社会に適合しにくくなってゆくが、時代を通して考察することにより、漢族社会の大きな変容をつかむことができると考える。

[研究実施概要]

本年度も昨年度に引き続き、宋代以降の戸婚・田土・錢穀などを扱う「民事」法令を分析し、それらがどのように変遷してきたかを明らかにしてきた。

本研究班は過去5年間、この方向で研究活動をしてきた。そして、この5年間の研究を通して、改めて法令そのものに視点をあてる重要性を再確認した。今年度はこのような過去の研究蓄積を踏まえたうえで、新たな研究成果を論文集として公刊する準備を整えた。

- a) 昨年度に引き続き、宋～清の条例の収集に努めた。
- b) 研究班の各自の研究に資する国内外の史料収集活動を継続的に実施した。
- c) 収集した条例の整理、解説を行うのと並行して定期的に研究会を開き、メンバー各自が作成した論文の相互検討を行い、2013年内に研究成果としての論文集を公刊することをめざした。

(2)近代中国研究班

「20世紀前半日本の中国調査」

本研究は、1910年代から40年代前半に日本の諸研究調査機関が中国で実施した調査活動に関する資料収集とその分析を行うもので、その重点は華北におくが、地域的特質を検討するために華中南を含め、日本側および中国側の資料の活用について新たな視点から再整理をはかり、20世紀前半期の中国社会の全体像を考察する。2011年度に引き続き、「華北」認識の問題を中心テーマとする。

[研究実施概要]

- a) 2011年度に開催した国際シンポジウム「華北の発見」における報告を基に論文集刊行の準備をおこなった。すなわち各報告者は論文第1稿を作成して、それに対して外部の近中班関係者からコメントを聞く原稿検討会を開催し、また班員相互のコメント交換も行って最終稿の準備に入った。
- b) 日本及び中国における資料調査・収集を引き続きおこなった。
- c) 『近代中国研究彙報』第35号を刊行した。

(3)東北アジア研究班

①「日本所在近世朝鮮文献資料研究(2)」

当班では2004年度以来、京都大学附属図書館や天理大学附属天理図書館今西文庫をはじめ、日本国内の各機関・個人が所蔵している近世朝鮮の記録類の調査を進めてきた。本課題はそれをさらに継続し、第2次調査をおこなうことにより、解題目録の完成を期すことをめざす。すでに近世朝鮮の古典籍類(いわゆる「朝鮮本」)については総合的な調査が進められ、その全貌がある程度解明されているが、これに対し地方官庁や民間で作成され、「成冊」などと呼ばれる帳簿

類をはじめとする各種の記録類については、これまで全体的な調査がなされることがほとんどなかった。2004年度からの第1次調査では、もはや現地では所在が確認されていない資料を発見し、その内容分析をおこなうなどの成果もあげており、第1次調査と今回の第2次調査によって、日本における当該資料類の悉皆的な調査をほぼ達成できるものと見込まれる。

[研究実施概要]

東京大学総合図書館、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所等において、当該機関が所蔵する近世朝鮮の記録類の調査および目録作成作業を実施した。上記調査の結果を整理し、『日本所在近世朝鮮記録類解題Ⅱ』刊行のための準備を進めた。

②「清朝満洲語檔案資料の総合的研究(2)」

清代の第一公用語である満洲語は、清初ばかりでなく、清朝一代にわたって用いられた言語である。18世紀の乾隆帝代より、京師に暮らす旗人たちは、日常語として漢語をもちいるようになっていったが、文章用語としての満洲語は、民国にいたるまで継続して利用された。現在、北京・中国第一歴史檔案館には、約1千万件の文書資料が保存されているが、その半分は、満洲語(または漢語とのいわゆる合璧)によって記されたものである。このことは、清代の文書伝達体系全体において、満洲語の利用が不可欠であったことを示している。とくに入関前(1644年以前)および清初の時期の文書・書籍、ならびに旗人、藩部をはじめとする辺境地方、そして対外関係等の文書において、多くの場合満洲語が用いられている。本研究は、これら満洲語で記された、または場合によっては印刷された清代の文献資料について、清初期を中心として総合的に検討を加えようとするものである。

[研究実施計画]

- a) 清初の「内国史院」関係文献と『鑲紅旗滿州衙門檔案』の研究を実施する。
- b) 『内国史院檔 天聰五年 Ⅱ』を刊行した。
- c) 『鑲紅旗檔』研究編(TBRL: *The Bordered Red Banner Archives in the Toyo Bunko*)の編集作業を継続した。

③「清代東アジア・北アジア諸領域の歴史的構造分析(2)」

中国ではこの数年にみられる内外政治・経済・民族を中心とする国家事業が急進するなか、長期間に亘って内在していた政治・経済・民族・文化問題が表面化している。チベットやウイグルをめぐる自治区の問題はその端的な事例であり、その影響は広く中央アジア・北アジア領域世界にも及んでいる。そこには、中国内地の諸領域世界とその周辺に連なる諸領域世界との一体化を進展させた清朝の最大版図が直接に現代中国と繋がるなか、その一体化から生じた政治・経済・民族・文化の問題も現代中国に直結していた反映と捉えられる特徴が多々窺える。新たに用いられ始めている「中華民族」の呼称はその顕著な例として捉えうる。本研究班では、中国内地の諸領域世界とその周辺に連なる諸領域世界との一体化を独自に進展させた清朝の国家領域構造と対外関係の問題を総合的に研究・分析してきた。刊行予定の英文論文集にこれまでの成果を反映させると共に、引き続き清代東アジア・北アジア諸領域における歴史的構造の全容を総合的に捉える研究体制を構築するべく、清朝の国家領域構造と対外関係を分析する上で不可欠な檔案(公文書)類のうち、保存収蔵状況が未詳な檔案類を中心に体系的に蒐集、整理、デジタル化し、向後の研究に貢献することを目的とする。

[研究実施概要]

- a) TBRL: *The Historical Structures of Eastern and Northern Asia in the Qing Dynasty Era*. [仮題]の刊行と平行して、欧文論叢(TBRL)『清代諸領域の歴史的構造分析』第1巻・清朝初期政治史研究(1)ならびに欧文論叢(TBRL)『清代諸領域の歴史的構造分析』第2巻・『壇廟祭祀節次』の刊行を準備した。
- b) 前年度に引き続き、清朝政治史、清代中国社会経済史、清代中国近代政治史、清代モンゴル・露清関係史、清代中国西南民族史の各専門研究領域をもとに、既成の領域世界・時代区分の枠を越えて海外における図書館・檔案館・研究機関などに所蔵されている檔案文献史料類の史料調査・現地調査を実施し、旧来のマイクロ=フィルム方式や新たなデジタル化方式による蒐集・整理・分析作業を行うと共に、中国で新たに影印されている大部の檔案文献史料

類の蒐集を進めた。

- c) 上記の文献史料類について、目録作成を進めると共に、デジタル化によって幅広い利用ができるようにした。同時にまたこれらの新規蒐集史料と東洋文庫収蔵の文献資料とを活用し、上記の課題に関する研究を推進し、その研究成果を個別論文・論文集・史料集などの形で公開することを目指した。欧文論叢(TBRL)として準備した『清代諸領域の歴史的構造分析』第2巻・『壇廟祭祀節次』はその一環であり、東洋文庫所蔵の『壇廟祭祀節次』(漢文・満洲文)を取り上げ、広く中国の国家祭祀研究への大きな貢献をめざしたものである。

(4) 日本研究班

「岩崎文庫貴重書の書誌的研究(2)」

東洋文庫所蔵の岩崎文庫には日本の文化・文学・言語を研究する上で重要な典籍が数多く所蔵されているが、その書誌的調査は未だ十分にはなされていない。2006年度までに室町時代以前に成立した古写本・古版本についての書誌解題(I~V)を公刊したことを受けて、ひき続き近世の成立ないしは刊行の貴重書を調査して研究の基盤を整備するとともに、その成果を広く公開することをめざしている。

[研究実施概要]

東洋文庫所蔵の岩崎文庫の中から、近世の成立ないしは刊行の貴重書の調査、研究基盤の整備、その成果の公開につとめ、2012年度には江戸期刊行・成立の歌書に関する『岩崎文庫貴重書書誌解題VII』を公刊した。

2. 内陸アジア研究部門

(1) 中央アジア研究班

①「サンクトペテルブルグ所蔵古文献の研究—ウイグル文を中心として—」

東洋文庫が入手したサンクトペテルブルグの東洋学研究所のマイクロフィルムのうち、ウイグル語とソグド語については『東洋文庫所蔵 St. Petersburg ウイグル文字・ソグド文字・マニ文字写本マイクロフィルム仮目録[第1稿]』として、初期の現地での実見データの一部を取り込んだフィルム番号整理一覧を、2002年に刊行した。その後、マイクロフィルムのデータを昨年までのプロジェクトでデジタル整理を続けた。ほぼ完成に至った目録の改訂版を原稿とし、冊子かデジタルデータの形で編集し直して刊行することは、内外研究者の要望に沿うことになる。ただし、東洋文庫と東洋学研究所の初期の契約の制約があるため、その刊行方法については慎重に検討をおこなうものとした。については、ウェブ上に未公開のものを含む大英図書館蔵のウイグル文字文献の一覧表などと合わせて刊行する可能性も検討したい。その中から、文書研究の成果についての論文をこれに付すこととする。

[研究実施概要]

- a) 研究班メンバー各自が、本データベースを利用しながら個別に古文献研究を進めた。
- b) 『東洋文庫所蔵 St. Petersburg ウイグル文字・ソグド文字・マニ文字写本マイクロフィルム仮目録[第1稿]』に収載されている古文献(とくにウイグル語)に関する研究文献リストを追加作成した。
- c) 漢文文献として整理されていたマイクロフィルムの中に含まれるウイグル語文献について、2-(1)–③「漢語文献」グループとの連携のもとで、データ整理をおこなった。
- d) 「サンクトペテルブルグ東洋学研究所所蔵ウイグル古文献目録(増補版)」作成のためのデータ修正を進めた。
- e) 本研究班の仕事と関連して、東洋文庫で開催された国際シンポジウム“Central Asia Studies and Inter-Asia Research Networks: Integrated Study of Dynamism in the Central Asian Regional Sphere”(2013年3月2~3日)の第1セッション“The Multi-dimensional Character of Central Asian Cultures as Seen from the Variety of the Scripts and Languages of Excavated Texts”に、研究班メンバーが参加し、中央アジア出土古文献に関する議論をおこなった。

②「近現代中央ユーラシアにおけるイスラームと政治権力」

2012年度は関連する資料の収集のほか、いずれも東洋文庫で開催された講演会・シンポジウムで有益な研究報告に恵まれたことを特記しておきたい。まず、Stéphane Dudoignon (CNRS, Paris), “(Re-)Making the History of Soviet Islam: Some Emergency Tasks and Perspectives” (2012年9月28日)は、ソヴィエト期およびポスト・ソヴィエト期のイスラームを理解するには、「公式」および「非公式」のイスラームのような単純な二分法的な分析枠組みを乗り越える必要があること、また各地の宗教界の動態をミクロの視点から、当事者からのインタビュー調査などの手法によって解析する必要性を指摘して今後の研究に大きな示唆を与えた。次に、秋山徹(日本学術振興会特別研究員)「パートゥルたちの「近代」:クルグズ遊牧社会とロシア帝国」(2013年2月19日)は、帝政ロシア統治下の遊牧クルグズ首領層がイスラーム的な価値や権威を積極的に活用することにより政治・社会的な地位の保全をはかったことを実証するものであり、近代のクルグズ社会におけるイスラームの意義を再検討する機会となった。最後に、東洋文庫の国際シンポジウムIntegrated Study of Dynamism in the Central Asian Regional Sphere の第3セッションThe Revival of Islam in Central Asia: Links with West and South Asiaでは、現代中央アジアにおけるイスラーム復興を考える上で南アジアおよびイランとの関係はきわめて重要な意味をもつことが確認された。以上の報告は、今後の研究に指針を与えるにちがいない。

[研究実施概要]

- a) 引き続き海外における史料収集を行う。タシュケント(ウズベキスタン)、カザン、サンクトペテルブルク(ロシア)などの図書館や研究機関のほか、各地の民間に所蔵されている史料の収集を現地の研究者や所蔵者の協力を得て行う。
- b) a)の史料のうち、とくに定期刊行物についてはデジタル化によって幅広い利用ができるようにし、文書史料については目録作成を進める。
- c) 新規収集史料と東洋文庫の蓄積してきた豊富な文献資料とを活用し、研究会の開催などを通して、上記の課題に関する研究を推進する。あわせて、その成果の刊行に努める。
- d) 東洋文庫で開催された国際シンポジウム“Central Asia Studies and Inter-Asia Research Networks: Integrated Study of Dynamism in the Central Asian Regional Sphere” (2013年3月2～3日)の第2セッション“The Regional Image of Central Asia as Portrayed in 18th-20th Century Historiography: Central Asian, Chinese and Russian Perspectives”、第3セッション“The Revival of Islam in Central Asia: Links with West and South Asia”、に研究班メンバーが参加した。

③「サンクトペテルブルグ東洋学研究所所蔵内陸アジア出土漢語文献マイクロフィルム目録のデータベース化」

2002年に東洋文庫が世界にさきがけて入手した東洋学研究所の内陸アジア出土文書マイクロフィルム(全363リール、約25万齣)には、4、5世紀から15世紀に及ぶコータン・サカ語、西夏語、チベット語、ウイグル・ソグド語、漢語、チャガタイ・トルコ語、サンスクリット語、アラビア語、ペルシア語、満州語、モンゴル語の11言語の文書が含まれている。このフィルム資料の目録をデータベース化してそれを公開することは、わが国だけでなく、諸外国の研究機関・研究者の希求するところ切なるものがある。

本研究は、上記フィルムの中からとくに漢語文献を抽出してそのフィルム目録のデータ化を図るとともに内陸アジア出土漢語文献の特性を明らかにすることを目的とする。

[研究実施概要]

- a) 敦煌出土文献Reels256～363のうち、漢語文献のある40リール(266～277、279～286、292、334～337、349～363)についてリールに付された各文献整理番号とその齣数とを対照させた仮目録を完成し、各文書に付された文献番号の「索引」作りに着手した。
- b) 前年度に引き続き、『俄藏敦煌文献』(上海古籍出版社、1993)中の未収録漢語文献約700件について、内容の検討を行った。
- c) 上記サンクトペテルブルク所蔵ウイグル・ソグド文字文献全31リールのうち、21リールに含まれる漢語文献約1,100件余りについて、文献番号とそのmicrofilm齣数とを対照した「仮目録」を作

成した。

- d) 上記サンクトペテルブルク所蔵チベット語文献(全35リール)のうち、6件の漢語文献を明らかにした。
- e) 本研究班における第2次研究成果として2014年度に『敦煌・吐魯番出土漢語文献の様式・特性の研究』(仮)の出版を計画している。そのために、定期的に「内陸アジア出土古文献研究会」を行うとともに、新たに「8-11世紀内陸アジア出土漢語文書輪読会」を開催した。
- f) 本研究班の仕事と関連して、東洋文庫で開催された国際シンポジウム“Central Asia Studies and Inter-Asia Research Networks: Integrated Study of Dynamism in the Central Asian Regional Sphere”(2013年3月2～3日)の第1セッション“The Multi-dimensional Character of Central Asian Cultures as Seen from the Variety of the Scripts and Languages of Excavated Texts”に、研究班メンバーが参加し、中央アジア出土古文献に関する議論をおこなった。

(2)チベット研究班

「チベット蔵外文献の書誌的研究(2)」

チベット研究班においては、新たに発見された写本を中心とするチベット語資料を収集・保管し、歴史・文化・宗教の各分野にわたるチベット語文献の体系的網羅的なコレクションの充実をはかることを目的とする。収集した資料については目録化を行い、データベースを作成すると同時に、敦煌チベット語文献、河口慧海将来文献などとともに東洋文庫所蔵チベット語蔵外文献として写本校訂と訳注研究を行い、電子データベースあるいはシリーズ刊行物として公開する。以上の3点により、世界的なチベット学の研究拠点として高い貢献を目指すものである。

[研究実施概要]

- a) 資料収集:近年中国で新たに発見された10～13世紀のチベット語写本の影印版を収集した。チベット語大蔵経文献、蔵外文献の電子版を購入し、コレクションの体系的な充実をはかった。
- b) a)によって収集した資料の整理を行った。
- c) チベット人研究協力者の協力のもとに、次の研究を行なった。
 - 1. 筆記体写本の校訂:古いチベット語写本の多くは手書きの筆記体で書かれており、一般研究者には解説が難しいものがある。それらをチベット人協力者の指導を得て校訂し、活字体テキストデータベースを作成した。
 - 2. 1のデータベースをもとに文献の解題を作成した。
- d) *Studies in Tibetan Buddhist Text* vol.1(シャン・タンサクパ『中観明句論註釈』第1分冊)を刊行した。

3. インド・東南アジア研究部門

(1)インド研究班

「インド刻文史料の蒐集と研究」

インド(南アジア)の刻文研究は、これまでわが国でごく僅かな研究者しかいなかったが、近年、ドラヴィダ系言語について石川寛、太田信宏、アーリヤ系言語について三田昌彦、古井龍介といった若手研究者が育ってきた。刻文は、「史書なきインド」の古代・中世史研究におけるの根本史料であるにもかかわらず、そのようなこれまでの状況から、わが国においては、テキストおよび研究書の蒐集が充分とは云えない。

他方、インド自体での刻文研究は、テキストの出版が遅れていることと、若手研究者が育たないことによって、危機的な状況にあるとさえ云いうる。また、世界的にも、インド刻文の研究者数は、極めて少ない。

そのような状況に鑑み、わが国の研究機関において、未出版のものをも含めてインドの刻文史料を蒐集し、それを国際的に公開しながら、わが国の新しい研究者の力を結集して、インド古代史・中世史の研究進展を図ることは、わが国のインド研究に課せられた急務と云えよう。

[研究実施概要]

- a) 東洋文庫に所蔵のない刻文史料や、欠けているものについて、インド独立後の新しい出版物(とくに、出版状況が明らかでない州政府考古学局等のもの)を購入、あるいはコピーの形で収

集することにしていたが(未出版刻文のトランスクリプトは、許可を得て、マイソールの刻文部でコピーして蒐集する)、2012年度には、班の予算をインド人研究者の招聘に充て、班メンバーが然るべき時期にインドを訪問出来なかったため、刻文関係の資料収集は、*Dictionary of Social, Economic, and Administrative Terms in South Indian Inscriptions*, Ed. by K.V. Ramesh, General Editor R.S. Sharma, Vol. I (A-D), ICHR, New Delhi: Oxford University Press, 2012, その他、ごく少数にとどまった。2013年度には、メンバーがインドを訪れ、その蒐集に努めたい。

- b) 個々の研究者による研究としては、班の各メンバーがこれを活発に行った。なお、2013年度には、東南アジア研究班と共同して、南アジアおよび東南アジアにおける国家および社会統合について、刻文を史料とした研究を班として行う予定である。

(2) 東南アジア研究班

「近現代東南アジアに関する史料研究」

近代日本と東南アジアは、明治期の後半から緊密な関係を有し始め、第二次世界大戦期に日本は東南アジアを軍事占領した。また戦後日本は、東南アジアと緊密な経済関係を形成するに至っている。こうしたなかで日本の東南アジア研究も、この40年間に飛躍的な研究の発展をとげた。ただし日本の東南アジア研究は、第二次世界大戦後にいきなり始まったわけではない。すでに大正期より東洋史の東西交渉史の一分野として南洋史が注目を浴び、また南洋ブームの高まりとともに経済関係の文献も出版されていた。そして第二次世界大戦期には、翻訳本も含め多数の東南アジア関係の文献が出版された。これらの文献は、一部の実証研究を除いて、学術的にあまり注目を浴びてこなかった。しかしそれらは、日本の東南アジア観を検討するためのみならず、東南アジア社会を考察する上においても、重要な資料となりうる。本研究は、従来力点が置かれた日本の東南アジア関与という観点からのみならず、当時の東南アジアの社会統合に果たした日本人の役割の視点からその記述を検討し、日本人をはじめ中国人やインド人さらにはアラブ人や欧米人など多様な人々が居住した近代東南アジア社会の特質について研究する。

[研究実施概要]

- a) 近代東南アジアの都市の社会統合に果たす日本人の役割に関する文献資料の収集と整理を行なう。合わせて、第二次世界大戦後に出版された戦前・戦中期の日本の東南アジア関係の文献の目録を作成する。
- b) 東南アジアの主要都市を訪れ、日本人を含む外来系住民の居住空間の歴史的展開を調査する。
- c) 研究会を開催して文献調査や訪問調査の成果をもとに議論を構築する。その成果を、本プロジェクト終了年度に、出版物として刊行する計画を進める。

4. 西アジア研究部門

西アジア研究班

「イスラーム世界における契約文書の研究(2)」

ワクフ(宗教的寄進)は、都市や農村の宗教施設を建設するだけでなく、経済基盤となり、政治権力者、名士、民衆の結びつきをつくった。ワクフに関わる、法学書、年代記、地理書などの叙述史料とワクフ寄進文書や調査台帳などの文書史料を収集し、諸地域における実態と歴史的変容を解明する。また、第一期からの継続課題であるヴェラム文書(16-18世紀にモロッコで作成された皮紙のアラビア語契約文書、東洋文庫所蔵)について、文書の校訂と研究をすすめ、その成果を英文で出版する。

[研究実施概要]

- a) ヴェラム文書について、文書テキストの解読のための研究会を月例で開催し(計12回)、東洋文庫が所蔵する8点の皮紙文書の校訂テキストを作成し、モロッコの現地研究者との閲読を行い、関連資料の収集・調査を行った。
- b) ワクフ文書の総合的研究にむけ、フランスCNRS国際共同研究プログラム(研究代表者マルセイユ＝エクサンプロヴァンス大学R・ドゥギエム教授)と連携し、同プログラムが主催するワークショップに参加した(7月、12月)。イランのワクフ寄進台帳(マシュハドのイマーム・レザー廟、19世紀)の校訂・研究の出版準備作業を進めた。

C. 資料研究

資料研究部門

東アジア資料研究班

「東アジア資料の研究」

中国、台湾、香港、東南アジア華人社会などに所蔵される文献資料の探索、各国図書館との国際的情報交換・資料交換・人的交流を目指す。

[研究実施概要]

a) 中央研究院歴史語言研究所との間の交流協定により、同所の作成した漢籍文献データベース（収録件数300,000,000件）の提供を受ける一方、東洋文庫所蔵もリソソパンフレット、マイクロフィルム100,000コマを提供した。

b) 東アジア郷村祭祀資料の収集とデータベースによる公開

中国天津、南開大学文學院副教授呉真氏を招き、日本の郷村祭祀の現地調査を共同して実施した。夏8月には、静岡県水窪町の中元節念仏踊り、奈良県法隆寺の盂蘭盆供養、春日大社の萬灯会、冬1-2月には、長野県阿南町新野の雪祭り、大分県黒仁田の高千穂神楽、山形県楡引町の黒川能などを調査した。これらの映像資料は、データベースを構築して、文庫ホームページから公開する予定である。

なお、1978年以來の中国の祭祀演劇に関する東洋文庫所蔵動画資料の一部（香港海陸豊劇）もホームページから公開した。同カラー写真資料15,000枚もデータベースとして、来年度中に公開する予定である。

c) 南京図書館との交流

南京図書館善本特蔵室の研究員、周艶氏を招き、文庫所蔵の善本の書誌情報につき、共同調査を実施した。

D. 各種研究会・講演会開催

数量／月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
研究会数	7	13	18	14	11	14	13	15	13
参加人数	60	147	295	175	141	192	272	323	189

1月	2月	3月	計
3	6	11	137
23	114	254	2,185

II. 資料収集・整理

A. 資料購入

超域アジア研究、アジア諸地域研究、資料研究において必要とされる一次資料を中心に購入を進めた。

区 分	和漢書	洋 書	その他
総合アジア圏域研究	62冊	4冊	0件
超域・現代中国研究	254冊	34冊	0件
超域・現代イスラーム研究	0冊	1,110冊	13件
東アジア研究	361冊	11冊	0件
内陸アジア研究	73冊	64冊	20件
インド・東南アジア研究	1冊	6冊	19件
西アジア研究	0冊	473冊	0件
共通（継続・大型資料）	1,309冊	278冊	2件
合 計	2,060冊	1,980冊	54件

B. 資料交換

国内外各提携機関との間で資料交換を進めた。

区 分	受 贈				寄 贈		
	和漢書	洋 書	その他	計	和漢書	洋 書	計
単行本	3,600冊	232冊	1,452冊	5,284冊	295冊	907冊	1,202冊
定期刊行物	1,782冊	346冊	—	2,128冊	4,465冊	1,073冊	5,538冊
計	5,382冊	578冊	1,452冊	7,412冊	4,760冊	1,980冊	6,740冊

C. 資料保存整理

2012年4月1日～2013年3月31日までの期間における、保存整理作業は、下記の通りである。

- ・マイクロフィルム劣化防止作業 484件

Ⅲ. 研究資料出版

A. 定期出版物刊行

1. 『東洋文庫和文紀要』(東洋学報) 第94巻第1～4号 A5判 4冊(刊行済)
2. 『東洋文庫欧文紀要』(*Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*) No.70 B5判 1冊(刊行済)
3. 『近代中国研究彙報』 第35号 A5判 1冊(刊行済)
4. 『東洋文庫書報』 第44号 A5判 1冊(刊行済)
5. 『新たなアジア研究にむけて(超域アジア研究報告)』 第9号 B5判 1冊(刊行済)
6. *Asian Research Trends New Series* No.7 A5判 1冊(刊行済)
7. *Modern Asian Studies Review* Vol.4 A5判 1冊(刊行済)

B. 論叢等出版

1. *Studies in Tibetan Buddhist Texts* vol.1 (シヤン・タンサクバ『中観明句論註釈』1) B5判 1冊(刊行済)
2. *The 1946 Republic of Kurdistan: A Research on the Struggle for Independence And Its Historical Significance* (英語/クルド語) B5判 1冊(刊行済)
3. 『岩崎貴重書書誌解題VII』 B5判 1冊(刊行済)
4. 『修訂版 敦煌・吐魯番出土漢文文書の新研究』(汲古書院と共同出版) B5判 1冊(刊行済)
5. 『内国史院檔 天聰5年II』 B5判 1冊(刊行済)

IV. 普及活動

A. 研究情報普及

1. 東洋学講座

(春 期) 共通テーマ「東洋文庫ミュージアムオープン記念講演会〈東洋文庫と本の世界〉」

第 529 回 2012 年 6 月 11 日(月)

「オランダ語・日蘭関係史料による 19 世紀の古気候再現

—東洋文庫に収蔵されるシーボルト史料を発端として—

神戸大学大学院教授

塚原東吾氏

第 530 回 2012 年 6 月 20 日(水)

「チベットの文字の文化史」東洋文庫研究員

神戸市外国語大学客員研究員

岩尾一史氏

第 531 回 2012 年 6 月 29 日(金)

「エジプトにおける民主主義の系譜と議会文書」

東洋文庫研究員

名古屋商科大学教授

池田美佐子氏

(秋 期) 共通テーマ「東洋文庫と本の世界II」

第 532 回 2012 年 11 月 19 日(月)

「判ると楽しい“大清帝国”文献史料」

東洋文庫研究員

国士舘大学教授

石橋崇雄氏

第 533 回 2012 年 11 月 30 日(金)

「モリソンパンフレットの世界」

京都府立大学准教授

岡本隆司氏

第 534 回 2012 年 12 月 3 日(月)

「中国の族譜と同族結合の実態」

東洋文庫図書部長

田仲一成氏

2. 特別講演会

2012年6月16日(土)

「エジプトにおけるクフルとその容器」

東洋文庫研究員

真道洋子氏

“Beauty and Cosmetics in Ancient Egypt” [英語・通訳なし]

ヘルワン大学教授

ZAKI, Gihane 氏

2012年7月10日(火)

“Women’s Sufi Community in a Country in Turpan, Xinjiang” [英語・通訳なし]

新疆大学教授

ラヒラ・ダウト氏

2012年7月20日(金)

「国図敦煌特蔵中の《大般若経》: 中国国家図書館・敦煌特蔵中の《大般若経》」

[中国語・通訳あり]

上海師範大学教授

方広錫氏

2012年9月28日(金)

“(Re-)Making the History of Soviet Islam: Some Emergency Tasks and Perspectives”

[英語・通訳なし]

フランス国立科学研究センターCNRS研究員

DUDOIGNON, Stéphane 氏

2012年11月10日(土)

“Myth and Ritual: the case of Islamized Shamanism in Xinjiang” [英語・通訳なし]

フランス国立科学研究センター・上席研究員(研究ディレクター)

ZARCONI, Thierry 氏

2012年11月20日(火)

「フェルガナ盆地に保存されるカーディー文書の研究史について」[ロシア語・通訳あり]

ウズベキスタン共和国フェルガナ州立郷土博物館長

ハバードウル・J・ハシモフ氏

「ザキ・ヴァリディ・トガン: 亡命期前半の生活と著作(1923~1948年)」[ロシア語・通訳あり]

ロシア科学アカデミー・ウファ学術センター歴史言語文学研究所

バシコルトスタン歴史・文化史部主任

マルスィリ・N・ファルフシャートフ氏

2012年12月10日(月)

“"Imperial Thinking" and the New Qing History” [英語・通訳なし]

Harvard University, East Asian Languages and Civilizations

ELLIOTT, Mark C. 氏

2013年3月23日(土)

「中国陳情の研究--社会深層からの視点」 [英語・通訳あり] 於: 早稲田大学現代中国研究所

中国外交学院教授

李紅勃氏

2013年3月27日(水)

“Scholarly Publishing in English: What Editors Expect” [英語・通訳なし]

Publishing Director, National University of Singapore Press

KRATOSKA, Paul 氏

3. 東洋文庫談話会

2013年2月19日(火)

「バートゥルたちの「近代」——クルグズ遊牧社会とロシア帝国——」

日本学術振興会特別研究員(PD)

秋山 徹 氏

2013年3月7日(木)

「20世紀初頭におけるチベットの領域問題の形成」

日本学術振興会特別研究員(PD)

小林 亮介 氏

2013年3月25日(月)

「日中戦争期の上海経済と企業経営」

日本学術振興会特別研究員(PD)

今井 就稔 氏

4. 公開講座

2012年4月14日(土) 《東インド会社とアジアの海賊展記念シンポジウム》

於:日仏会館

「アジアの人々と東インド会社という海賊」

東京大学東洋文化研究所教授

羽田 正 氏

「カワーシム海賊とは誰か?—現実と想像力との混交—」

日本学術振興会特別研究員

鈴木 英明 氏

「貿易、戦争、移民:18世紀マレー海域と東インド会社」

広島大学大学院文学研究科准教授

太田 淳 氏

「東南アジアの海域秩序と海賊」

東洋文庫研究員

弘末 雅士 氏

「海賊から商人へ—倭寇とオランダ東インド会社—」

東京大学史料編纂所准教授

松方 冬子 氏

「“中国海賊(チャイニーズ・パイレーツ)”イメージの形成」

日本学術振興会特別研究員

豊岡 康史 氏

「清朝に“雇われた”イギリス海軍」

東洋文庫研究員

村上 衛 氏

「中国沿海の商業と海賊行為1620-1640」

フランス極東学院研究員

CALANCA, Paola 氏

2012年5月19日(日)

「屏風に描かれたオランダ東インド会社の活動」

長崎歴史文化博物館研究員

深瀬 公一郎 氏

2012年8月18日(日) 《ア!教科書で見たゾ展記念シンポジウム》

「世界史は、ファンタジーワールドの物語か?!」

文京学院大学女子高等学校教諭

小川 宏明 氏

「世界史教科書、図表のキャプションまで読み込め!」

東京都立国分寺高等学校主任教諭

風間 睦子 氏

「エ!これ見てないゾ?! 世界史教科書の悩ましい図版選び」

東洋文庫研究員

岸本 美緒 氏

「東南アジアと日本を「つなぐ」「くらべる」~新しい世界史の威力と魅力~」

大阪大学教授

桃木 至朗 氏

2012年8月26日(月)

「東洋史の中の「東洋」—日中両国の東洋史教科書を通して—」

東洋文庫研究員

黄 東蘭 氏

2012年8月29日(金)・30日(土)・31日(日) 《東洋文庫アジア資料学研究シリーズ》

「東洋のCodicology－文理融合型東洋写本・版本学(講習会)－漢字文献を中心として」
東洋文庫研究員 石塚晴通氏
東洋文庫研究員 土肥義和氏

2013年1月26日(土) 《もっと北の国から展記念講演》

“幕末日露関係史の最前線:もっと北の国から日本への熱き視線”

「19世紀初頭の日本・ロシア・カラフト:ロシア所在日本関係史料の調査と研究」

東京大学史料編纂所副所長 保谷徹氏

「ロシア人の観た幕末日本:プチャーチン の来航とゴンチャロフ『日本渡航記』」

埼玉大学教養学部教授 澤田和彦氏

2013年1月27日(日) 《もっと北の国から展記念講演》

“もっと知ろう、もっと北の国Ⅰ:帝政ロシアの実像”

[北海道大学スラブ研究センター、人間文化研究機構プログラム イスラーム地域研究・現代中国地域研究 東洋文庫拠点共催、学習院大学史料館後援]

「ナポレオンのモスクワ遠征とロシア・イメージの変容」

北海道大学スラブ研究センター助教 越野剛氏

「総督制を通じたロシア帝国の統合:西における民族操作、東における空間操作」

北海道大学スラブ研究センター教授 松里公孝氏

2013年2月10日(日) 《もっと北の国から展記念講演》

“もっと北の国の音楽:魅惑のバラライカ” [東京芸術大学共催]

「バラライカはロシアの伝統楽器か?」

宮城教育大学名誉教授 森田稔氏

「ロシアの民族音楽とバラライカの魅力」(レクチャーと演奏)

東京芸術大学音楽研究センター教育研究助手 マキシム・クリコフ氏

2013年2月16日(土) 《もっと北の国から展記念講演》

“もっと知ろう、もっと北の国Ⅱ:中央アジアからのまなざし”

[北海道大学スラブ研究センター、人間文化研究機構プログラム イスラーム地域研究・現代中国地域研究 東洋文庫拠点共催、学習院大学史料館後援]

「中央アジアと東西の帝国:ロシアからの視線と中国からの視線」

早稲田大学イスラーム地域研究機構次席研究員 野田仁氏

「中央アジアから「北の国」へのまなざし:近代知識人のロシア観を手がかりに」

北海道大学スラブ研究センター教授 宇山智彦氏

2013年2月17日(日) 《もっと北の国から展記念講演》

“もっと知ろう、もっと北の国Ⅲ:北海道とサハリン”

[北海道大学スラブ研究センター、人間文化研究機構プログラム イスラーム地域研究・現代中国地域研究 東洋文庫拠点共催、学習院大学史料館後援]

「19世紀のアイヌ社会と蝦夷地・北海道」

北海道大学大学院文学研究科・文学部准教授 谷本晃久氏

「19世紀のサハリン」

北海道大学スラブ研究センター准教授 兔内勇津流氏

2013年2月23日(土) 《もっと北の国から展記念講演》

“ロシアの正教、正教のロシア:頭でロシアはわからない、心で親しむ歴史と文化”

「正教会における祈り:チェルノブイリとイコン」

清泉女子大学文学部専任講師

井上 まどか 氏

「古儀式派とロシア政治:日露戦争からソ連崩壊まで」

法政大学法学部教授

下斗米 伸夫 氏

「ロシア文学における正教と異端派」

東京外国語大学学長

亀山 郁夫 氏

2013年2月24日(日) 《もっと北の国から展記念講演》

“もっと知ろう、もっと北の国IV:せめぎ合う二つの大国”

[北海道大学スラブ研究センター、人間文化研究機構プログラム イスラーム地域研究・現代中国地域研究 東洋文庫拠点共催、学習院大学史料館後援]

「北京からサンクト・ペテルブルクへ:清朝の遣ロシア使節をめぐって」

早稲田大学文学学術院教授

柳 澤 明 氏

「ロシアと中国:境界問題の歴史と現在」

北海道大学スラブ研究センター教授

岩下 明裕 氏

2013年3月2日(土)・3日(日) 《総合アジア圏域研究国際シンポジウム》(使用言語:英語)

[イスラーム地域研究東京大学拠点共催]

Central Asia Studies and Inter-Asia Research Networks:

Integrated Study of Dynamism in the Central Asian Regional Sphere

SESSION 1:

The Multi-dimensional Character of Central Asian Cultures as Seen from the Variety of the Scripts and Languages of Excavated Texts

Coordinator: UMEMURA Hiroshi

(Research Fellow, Toyo Bunko; Professor, Chuo University)

Speakers, Titles:

DOHI Yoshikazu (Research Fellow, Toyo Bunko)

“The Dynamism Inherent in Han Chinese Personal Names as Shown in Index of Chinese Surnames Appearing in the Dunhuang Chinese Documents Dating from the Late 8th to the Early 11th Century”

Peter ZIEME (Professor, Institute of Turcology, Free University, Berlin)

“Personal Names of Central Asian Christians: Focusing on Old Uighur Manuscripts”

TAKEUCHI Tsuguhito

(Research Fellow, Toyo Bunko; Professor, Kobe City University of Foreign Studies)

“Various Ethnic Groups with Tibetan Personal Names in the 9th-12th c. Texts and Inscriptions”

NICHOLAS SIMS-WILLIAMS (Professor, SOAS, London University)

“Personal Names in Bactrian Sources and Their Varied Ethnic Origins”

Commentators:

YOSHIDA Yutaka (Research Fellow, Toyo Bunko; Professor, Kyoto University)

MATSUI Dai (Research Fellow, Toyo Bunko; Professor, Hirosaki University)

SESSION 2:

The Regional Image of Central Asia as Portrayed in 18th-20th Century Historiography: Central Asian, Chinese and Russian Perspectives

Coordinator: SHINMEN Yasushi

(Research Fellow, Toyo Bunko; Professor, Chuo University)

Speakers, Titles:

ONUMA Takahiro (Associate Professor, Tohoku Gakuin University)

“The Qing Dynasty and Its Central Asian Neighbors”

OBIYA Chika

(Associate Professor, Center for Integrated Area Studies, Kyoto University)

“Imperial Russia's Eyes on Central Asia: *Turkestanskii Sbornik* as a Set of Colonial Knowledge”

Ablet KAMALOV (Chief Research Associate, Institute of Oriental Studies named after R.B. Suleimenov under the Ministry of Education and Science of Republic of Kazakhstan, Almaty)

“Xinjiang in the Focus of Uyghur Studies in Soviet Central Asia”

Commentator:

NAKAMI Tatsuo (Research Fellow, Toyo Bunko; Professor, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies)

SESSION 3:

The Revival of Islam in Central Asia: Links with West and South Asia

Coordinator: KOMATSU Hisao

(Research Fellow, Toyo Bunko; Professor, Tokyo University of Foreign Studies)

Speakers, Titles:

Stephane DUDOIGNON

(Senior Research Fellow, Centre National de la Recherche Scientifique, Paris)

“Interactions between the Near and Middle East, Central and Inner Asia in the Muslim Religious Field”

Bayram BALCI (Visiting Scholar at Carnegie Endowment for International Peace, Washington DC)

“The Jama’at al Tabligh in Kirghizstan and Kazakhstan and Its Contribution to the Recreation of Islamic Relations between Central Asia and Indian Subcontinent”

YAMANE So (Professor, Osaka University)

“Think Umma, Use the Modern-Networks of Modern Muslim Intellectuals in South Asia, 1900-1930”

Commentator:

UYAMA Tomohiko (Research Fellow, Toyo Bunko; Professor, Slavic Research Center, Hokkaido University)

4. 普及展示企画

東洋文庫ミュージアムにおける展示企画について、展示テーマ、展示品の検討を重ねた。

5. 参考情報提供

『東洋文庫年報』 2011年度版

A5判 1冊(刊行済)

B. データベース公開

2012年4月1日～2013年3月31日までの期間における、東洋文庫の図書・資料のデータ(日本語・英語)に対するオンライン検索アクセス状況については、別添資料の通りである。

V. 学術情報提供

A. 図書・資料の閲覧(協力)サービス

数量/月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
閲覧者人数	175人	254人	276人	253人	310人	225人
閲覧図書数	1,538冊	2,324冊	3,477冊	3,257冊	3,012冊	2,627冊
レファレンス数	47件	68件	74件	68件	83件	61件

10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
211人	223人	197人	174人	192人	269人	2,759人
1,768冊	1,822冊	1,838冊	1,815冊	2,175冊	3,527冊	29,180冊
57件	60件	53件	47件	52件	72件	742件

B. 研究資料複写サービス

(1) マイクロフィルム・紙焼写真

区分	申し込み件数
数量	32件

(2) 電子複写

区分	申し込み件数	焼付枚数
数量	1,111件	37,705件

C. 研究情報提供サービス

区分	フィルム貸出	掲載	放映	パネル展示	復刻	資料展示貸出
数量	46件	132件	21件	10件	1件	3件

D. 展示

一般多数の方々を対象とした東洋学の普及を図る手段として、「東洋文庫ミュージアム」を運営した。

1. 基本方針

このミュージアムでは、特に東洋学に興味を持たない一般の方々を主な対象とし(中学生程度の歴史知識を前提)、これらの利用者に、ミュージアム見学を通して東洋学に興味を持つ機会を提供するものである。本ミュージアムは、東洋文庫の蔵書・史料を中心に種々の展示企画を組み立て、常に新たな発見と変化のある展示を心がけている。

2. 展示手法

広く一般の方々にミュージアム訪問の興味を喚起するため、①見学に適切な規模の展示内容とし、②展示の解説は日頃東洋学とは疎遠な利用者にも十分理解できる簡易なものとし、③デジタル技術等を取り入れた視聴覚的かつ斬新な展示で利用者の興味を引くことに努めた。

3. 施設

温度・湿度管理、窒素ガス消火設備運用により、展示図書・資料の保全に万全を期した。また、併設のギフト・ショップ、ミュージアム・カフェでは、東洋文庫の所蔵資料も紹介し、一般利用者に対してミュージアムの魅力を高め、東洋学普及の一翼を担う、ミュージアムの一体施設として運営した。

4. 展示スケジュール

常設展と企画展の組み合わせからなる展示スケジュールを立て、以下の展示を開催した。

- a) 常設展は国宝と浮世絵を中心に構成されており、保存と集客の観点から、毎月初めに展示資料の入れ替えを行った。
- b) 企画展は一年に3回の頻度で行っている。本年度は以下の企画展を実施した。
 - ①「東インド会社とアジアの海賊」(2012年3月7日～2012年6月24日)
 - ②「ア！教科書で見たゾ」(2012年7月4日～2012年11月4日)
 - ③「もっと北の国から：北方アジア探検史」(2012年11月14日～2013年3月10日)
 - ④「マリー・アントワネットと東洋の貴婦人」(2013年3月20日～2013年3月31日[継続])
- c) 各企画展において展示図録を作成した。全ページカラーで画像を多用し、解説文も平易なもの・わかりやすいものに仕上げた。A5版でハンディなブックレットタイプである。
- d) 上記企画展会期中に公開講座(企画展示記念講座)を開催した(敬称略)。
 - ①「東インド会社とアジアの海賊」展記念シンポジウムを日仏会館にて開催(4月14日)。
 - ②同展記念講演会を講演室にて開催(5月19日)。
 - ③「ア！教科書で見たゾ」展記念シンポジウムを講演室にて開催(8月18日)。
 - ④同展記念講演会を講演室にて開催(8月26日)。
 - ⑤「もっと北の国から：北方アジア探検史」展記念講演会を開催(1月26日・27日、2月10日、2月16日・17日、2月23日・24日)講演者と演題はIV-A-4を参照。

5. 文庫員ガイドツアー

ミュージアムへの来客サービス・集客戦略の一環として、文庫長・学芸員による館内ガイドツアーを実施し、好評を得た(開館期間は毎日15時に開催している)。

6. 学校連携

12月5日、東京藝術大学と協力協定を締結した。記念コンサートをミュージアム内にて開催し、多数の来場者を得た。

7. 熊本県・和歌山県連携

江戸時代の大藩、肥後熊本藩、紀州和歌山藩において藩政改革を実施し、その名を諸国にとどろかせた細川重賢、徳川治貞の二人の名君の足跡をたどるべく、熊本県、和歌山県との共催でリレーフォーラム「紀州の麒麟と肥後の鳳凰」を連続3回開催した。各回の講演者、演題は以下のとおり。

第1回(9月8日) 磯田道史(静岡文化芸術大学准教授)「18世紀に『藩の近代啓蒙』はあったか」

第2回(9月29日) 磯田道史(静岡文化芸術大学准教授)「熊本藩に生まれた『近代性』とは」

吉村豊雄(熊本大学教授)「藩主細川重賢の名君像をめぐる」

第3回(10月13日) 寺西貞弘(和歌山市立博物館館長)「紀州の麒麟—徳川治貞の生涯—」

8. 美術館連携

永青文庫および静嘉堂文庫との3館連携によるスタンプカード「文庫部(ふみくらぶ)カード」を導入した。3館の間での入場者増の相乗効果および知名度の向上を目的としている。

9. 入場者数

2012年4月～2013年3月における、ミュージアム総入場者数は以下のとおりである。

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
入場者数	2,229人	2,303人	3,083人	1,607人	1,479人	1,874人	2,416人

11月	12月	1月	2月	3月	計
1,667人	1,130人	804人	1,118人	1,384人	21,094人

E. 広報普及

東洋文庫所蔵の図書・史料の掲載・報道・放映等の依頼に適宜対応すると共に、ホームページを随時更新し、利便性を確保した。東洋学の若年層への普及を目指し、学校連携活動も行った。

1. 報道実績

ミュージアムに関しての報道実績の主なものを以下に挙げる(50音順)。

新聞： 全国紙『朝日新聞』、『読売新聞』、『日本経済新聞』など

雑誌： 『マンスリー三菱』、『歴史読本』など

テレビ： NHK「日曜美術館」、シアターテレビジョン「出光佐千子の美術館便り」、

BSジャパン「一柳良雄が問う日本の未来」

ラジオ： ラジオ日本「ラジオ喫茶八代」

BS-TBS「マークエステルが巡る日本神話の旅」、放送大学「歴史からみる中国(‘13)」など

2. 『東洋見聞録』

東洋文庫の活動をご支援頂いている「名誉文庫員」、「友の会会員」、職員OBほか関係者をつなぐニュースレターとして発行・頒布した。

3. メールニュース

東洋文庫ミュージアムのメールニュースをメール会員向けに毎月発信している。

F. 研究者の交流および便宜供与のサービス

1. 長期受入

(1) 外来研究員の受入

彌永 信美 (フランス国立極東学院 東京支部長)

「日本仏教」 (2012年9月1日～2013年8月31日、延長予定)

GIRARD, Frédéric (フランス国立極東学院教授)

「日本仏教」 (2012年9月21日～2013年9月20日、極東学院)

宋 好 彬 (高麗大学校民族文化研究院研究員)

「朝鮮本古典籍の調査」 (2012年9月1日～2013年8月31日、高麗大学校)

[受入担当：藤本幸夫]

ZIEME, Peter (元ベルリン トルファン研究所所長)
「古ウイグル文献学」 (2012年9月1日～2013年8月31日、私費)
[受入担当：梅村 坦]

呉 真 (南開大学副教授)
「日中祭祀演劇の比較について」 (2013年1月12日～2月6日、私費)
[受入担当：田仲一成]

(2) 2012年度日本学術振興会特別研究員PDの受入

小林 亮介(筑波大学大学院 PD)
「20世紀前半における「チベットの領域」問題の形成—東チベットを中心に—
(2010年度採用、11・12年度・3ヵ年間) [受入指導者・新免 康]

池尻 陽子(筑波大学大学院 PD)
「チベット仏教僧の思想とネットワークが清代内陸アジア史に与えた影響に関する研究」
(2010年度採用、11・12年度・3ヵ年間) [受入指導者・吉水千鶴子]

秋山 徹(日本学術振興会特別研究員 PD)
「近代中央アジアにおける地域秩序の再編過程:クルグズ部族首領層の動向を中心に」
(2010年度採用、11・12年度・3ヵ年間) [受入指導者・小松久男]

村上 正和(東京大学大学院 PD)
「清代中国社会と演劇文化」
(2011年度採用、12・13年度・3ヵ年間) [受入指導者・山本英史]

亀谷 学(北海道大学大学院 PD)
「パピルス文書による初期イスラーム時代統治システムの研究」
(2011年度採用、12・13年度・3ヵ年間) [受入指導者・後藤 明]

小林 隆道(早稲田大学大学院 PD)
「10-13世紀中国における統治と「文書」—官文書分析による史料批判学の再構築—」
(2011年度採用、12・13年度・3ヵ年間) [受入指導者・岸本美緒]

今井 就稔(一橋大学大学院 PD)
「日中戦争期中国資本家の研究—経済構造の変容と対日関係の模索—」
(2011年度採用、12・13年度・3ヵ年間) [受入指導者・久保 亨]

熊倉 和歌子(お茶の水女子大学大学院 PD)
「14-16世紀エジプトにおける徴税と村落社会:土地台帳をてがかりに」
(2012年度採用、13・14年度・3ヵ年間) [受入指導者・林佳世子]

小林 晃(北海道大学大学院 PD)

「12～15 世紀中国における華北・江南の政治的統合過程」

(2012 年度採用、13・14 年度・3 ヶ年間)

[受入指導者・山本英史]

2. 外国人研究者への便宜供与

China	張永江[中国人民大学教授](ほか29名)
France	DUDOIGNON, Stephane [Centre National de la Recherche Scientifique]
Germany	ZIEME, Peter
Iran	NAZARAHARI, Reza ambassador(ほか2名)
Kazakhstan	KAMALOV, Ablet [Institute of Oriental Studies]
Korea	金賢貞
Mongol	DASHDAYAA [Ider University, Ulaanbaatar](ほか6名)
Nederland	DOUW, Leo M. [Universiteit van Amsterdam]
Russia	ファルフ・シャートフ[ロシア科学アカデミー]
Singapore	黄基明[Institute of Southeast Asian Studies](ほか3名)
Turkey	BALI, Rifat [Libra Kitap]
UK	SIMS-WILLIAMS, NICHOLAS [London University]
USA	SHIN, Virginia [University of California](ほか1名)
Uzbekistan	ハバードウル・J・ハシモフ[フェルガナ州立郷土博物館長]

VI. 地域研究プログラム

A. イスラーム地域研究資料室

「イスラーム史料情報学の開拓」

現地語史資料の所蔵・整理・利用環境に関するアンケート調査の結果を踏まえ、現地語史資料の体系的収集を継続し、共同利用を促進する。調査やアラビア文字資料司書連絡会等で得た情報や要望に基づき、現地語史料の整理・書誌データ作成のための補助ツールや資料の作成と公開、「日本における中東・イスラーム研究文献データベース」の編集をはじめとする関連データベースの拡充を進める。また、史料研究について、原典講読会および国内研究機関との連携による研究活動を実施し、研究情報の共有と若手研究者の育成をはかる。これらによって、史料および研究文献の収集と整理(情報化)と利用の3つの局面を連結したサイクルを築き、国際的な共同利用にむけた環境改善をはかる。

[研究実施概要]

- 現地及び海外のイスラーム地域研究の動向と、東洋文庫等の国内機関の所蔵状況を踏まえ、現地語史資料の継続的・体系的な収集と整理を行った。「日本における中東研究文献データベース1868～」は、2013年3月現在で45,700件の書誌データを収録し、月平均1,000人(閲覧数は3,000回)の利用をえている。学生の情報検索スキルを高め、現地語史料の利用を促進するため、「卒論を書くための情報検索リテラシーセミナー」(第2回)を8月に開催した。募集開始直後に参加者が定員に達し、セミナーの需要と認知度の高まりが確認され、参加者の評価も良好であった。3月には「アラビア文字資料司書連絡会」(第7回)を開催し、現地語資料の収集と整理に関わる最新のトピック(NIIの目録規則の切換えなど)について、主要大学図書館、国立情報学研究所など関係機関の担当者らと情報共有・意見交換を行った。
- 史資料の研究活動や、研究で得られた知見を広く還元する各種セミナーを継続しており、様々な層の参加者が集まることで、従来の大学内のゼミでは見られなかったような相互作用が顕著になってきた。「シャリーアと近代」研究会は、オスマン民法典アラビア語版の講読・翻訳のための研究会を計9回行い、歴史や法学の研究者に加え、弁護士・実務者など幅広いメンバーの精力

的な参加によって、全体の約1/3にあたる「賃約の書」537条までの訳稿を作成した。刊行ずみの序篇(1-100条)につづき、「売買の書」(101-403条)のウェブ公開と、語彙集の作成を進め、イスラム法と近代制定法とを架橋する役割が明らかになりつつある。「オスマン帝国史料の総合的研究」研究会は、オスマン帝国史の多様な史料を類型ごとに解説するウェブ資料「オスマン帝国史料解題」を更新増補したほか、オスマン帝国における教育・知識社会史に関わる研究会を4回行った。他機関との連携プロジェクトである中央アジア法制度研究会、中央アジア古文書研究セミナー、オスマン文書セミナーは、専門的な史資料を扱うセミナーでありながら、毎年恒例のものとして多くの分野や若手の参加者を得ており、現地語史資料に基づいた地域研究の裾野は着実に広がっている。フランスCNRSのワクフ国際共同研究事業に参画し、国際連携を強化した。

B. 現代中国研究資料室

「現代中国研究資料の収集・利用の促進と現代中国資料研究の推進」

第一期の成果をもとに、現代中国関係資料を所蔵する国内外諸機関との連携を強化し、資料の系統的・効率的収集の態勢づくりを行う。既収・新収の現代中国関係資料の分析を通じて、近現代中国の変容について解明を進めるとともに、他拠点・他機関の協力を得つつ資料研究の成果を社会に向けて発信する。NACSIS-CAT への東洋文庫資料の登録を継続し資料利用の促進を目指す。またウェブ公開できる準備が整った資料については電子図書館で公開を進める。

[研究実施概要]

- a) 資料利用環境の整備および国内外諸機関との連携については、国立情報学研究所との連携により NACSIS-CAT への書誌登録を継続して行った。本年度中に約 4,500 タイトルの東洋文庫近代中国研究委員会(現・近代中国研究班)収集資料が登録され、登録タイトル数は 44,000 件あまりとなった。
- b) 電子図書館についても、引き続き拡充に努めた。画像をインターネットで完全公開している資料は 351 タイトルに増加した。また目次から検索できるシステムの整備など、利用環境を向上した。さらに中国の多くの高等教育機関が参加している図書デジタル化プロジェクト(CADAL (China Academic Digital Associative Library, 大学数字図書館国際合作計画))の担当者を招いたワークショップを開催し、図書デジタル化の最新状況を聞いた。
- c) 資料研究活動については、編成された5つの研究班のもとで、非常に活発に行った。研究班体制の初年度として、それぞれの組織や今後の運営方針を固めただけでなく、研究協力者の協力のもと、他機関・他大学との共催も含めて計 21 回の研究会・シンポジウムが開催された(江南地域社会班 5 回、図画像資料班 4 回、ジェンダー資料班 6 回、政治史資料班 4 回、1950 年代資料 3 回)。活動の成果として、近代中国の知識人が残した手書き日記の一部を活字化し注釈をつけた「王清穆『農隱廬日記』(2)」を『近代中国研究彙報』に公表した。
- d) 東洋文庫ミュージアムとの共催で、同所の企画展示に関連した一般向けの講演会を行い、多くの聴衆を集めた。また東洋文庫研究部との協同で所蔵資料「汪政権駐日大使館文書」の目録作成事業を開始した。

Ⅶ. 受託研究

特色ある共同研究拠点の整備の推進事業

「イスラーム地域史研究資料の収集・利用の促進とイスラーム史資料学の開拓」

本委託業務の目的は、ネットワーク型共同研究「イスラーム地域研究」の発展によって、グローバル化した現代のイスラーム理解を深化・向上させ、その成果を学界及び広く社会に還元すべく国際的な広がりを持つ新時代の共同研究拠点を構築することにある。また、共同研究実施にあたり、国内では公募研究を通じて幅広い人材の参加を促進し、国際的には研究者の協力のネットワークの強化を行い、さらに研究支援組織としても管理業務環境を整備・強化した事務体制を構築する。財団法人東洋文庫では、イスラーム地域研究の史資料センターとしての役割を果たすべく、引き続き、史資料の収集・利用の促進と、イスラーム史資料学の開拓に関わる研究開発を実施している。

[研究実施概要]

- a) 「イスラーム地域研究」の史資料センターである東洋文庫拠点の整備強化
 - ・イスラーム地域の史資料の収集・整理・利用に関わる研究活動のさらなる発展と集中的な史資料収集および資料整理・データベース入力事業を強化するため、必要なツール類を購入し、活動環境を整備するとともに、研究活動および管理業務活動の効率化を図った。購入図書リスト(PDF版)をウェブサイトで公開し、利用に供した。
 - ・拠点強化事業:「日本における中東・イスラーム研究文献データベース」遡及入力事業を実施した。
 - ・大学学部生・院生を対象に第2回「論文を書く学生のための情報検索リテラシーセミナー」(共催:NIHUイスラーム地域研究東洋文庫拠点)を開催した。
- b) 「イスラーム地域研究」の成果の発信の強化充実
 - ・公募による共同研究課題「イスラーム圏におけるイラン式簿記術の展開:オスマン朝治下において作成された帳簿群を中心として」(研究申請者:高松洋一(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所准教授))において、定例研究会の成果である訳註本を出版した。
 - ・拠点強化事業「日本における中東・イスラーム研究データベース遡及入力事業」を遂行すべく、当該地域・分野の文献書誌を調査し、データベース化を行い、ウェブサイトで公開した。
- c) 「イスラーム地域研究」の強化と公募による拠点拡大
 - ・公募による共同研究課題「イスラーム圏におけるイラン式簿記術の展開:オスマン朝治下において作成された帳簿群を中心として」(研究申請者:高松洋一(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所准教授))の活動を実施した。研究資料の収集および調査を進め、定例研究会やセミナー、講演会を開催し、成果発表を行った。また、国内外より研究協力者の参加を促し、研究の深化・拡大を図った。

2012年度財団法人東洋文庫特別事業報告書

財団法人 東洋文庫
理事長 榎原 稔

2012年4月1日から2013年3月31日までに行われた財団法人東洋文庫特別事業報告の概要は下記の通りです

事業内容

各研究計画に沿って、以下の研究活動を実施した。

A. 日本学術振興会科学研究費補助金による事業

1. 研究成果公開促進費(データベース等)の対象事業

「東洋学多言語貴重資料のマルチメディア情報システム」

[東洋文庫電算化委員会委員長:斯波義信]

「清朝前期のチベット仏教政策」

[研究代表者:池尻陽子(日本学術振興会特別研究員PD)]

2. 基盤研究等の対象事業

(1)「1910～1930年代における日本の中国認識-華北地域を中心に」 [研究代表者:本庄比佐子]
(基盤研究(B)、2009年度採用、5ヶ年間・第4年度目)

(2)「モノ」の世界から見た中世イスラームの女性～ガラス器と陶器を中心に～[新規]
[研究代表者:真道洋子] (基盤研究(B)、2012年度採用、4ヶ年間・第2年度目)

(3)「イスラーム法の近代的変容に関する基礎研究:オスマン民法典の総合的研究」[新規]
[研究代表者:大河原知樹] (基盤研究(B)、2012年度採用、3ヶ年間・第2年度目)

(4)「近代の地方名士 —マニサ地方を中心に—」 [研究代表者:永田雄三]
(基盤研究(C)、2010年度採用、3ヶ年間・第3年度目)

(5)「内陸アジア出土4～12世紀の漢語・胡語文献の整理と研究」 [研究代表者:土肥義和]
(基盤研究(C)、2010年度採用、3ヶ年間・第3年度目)

(6)「ジャウィ史料の利用によるマレー民族の形成過程の研究」 [研究代表者:坪井祐司]
(若手研究(B)、2012年度採用、4ヶ年間・初年度目)

(7)「隋唐洛陽城の水環境からみた穀倉と漕運の発展について」 [研究代表者:宇都宮美生]
(研究活動スタート支援、2012年度採用、2ヶ年間・初年度目)

B. 三菱財団補助金による事業

「東洋文庫アーカイブスの構築に関する調査研究」

[研究代表者:牧野元紀]
(2012年度採用、3ヶ年間・初年度目)

以上